

平成26年度 各種調査結果等を活用した学力向上の取組事例

事務所名	県北	学校名	久慈市立侍浜小学校	TEL	0194-58-2233
------	----	-----	-----------	-----	--------------

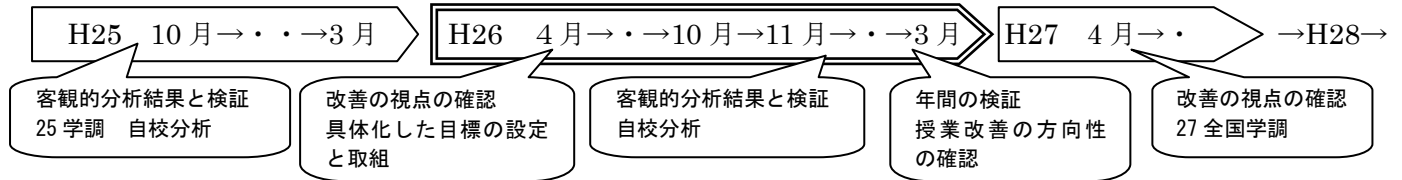
検証・改善サイクルを活かした学力向上

【ねらい】

○「各種調査結果等（主に全国学調・県学調）を分析し、その結果を指導に活かす検証・改善サイクルの構築」及び「日々の授業の充実」の2つの手立てにより、学力の向上を図る。

【具体的な取組】

I 指導に活かす分析・検証・改善サイクルの構築〔第1段階（H25年度）→第2段階（H26年度～）→第3段階（H27～）〕



1 H25年度の全国学調・県学調結果を活かす→26年度学力向上会議で「改善の視点」を全校で確認する。

(1)の① 25年度全国学力・学習状況調査結果の分析（抜粋）

- ア 正答率では、国語は、全国・県平均を上回っているが、「知識」に比べ「活用」の正答率が低い。算数は、「知識」は、全国を上回っているが、「活用」は、全国・県平均を若干下回っている。
- イ 質問紙調査では、「算数に苦手意識を持つ子どもが多い」「テレビ・ゲームの時間が長い」「家庭学習の時間が不足している」などの実態が見られる。

(1)の② 25年度岩手県学習定着度状況調査結果の分析（抜粋）

〔4年国語〕

・話すこと・聞くこと領域では、「目的にふさわしい話す内容を考えることができる」が低い状況にある。

〔4年算数〕

・平均正答数は23問である。全体の約7割の児童が平均より多く正答しており、児童が平均より高い正答数の範囲にあると言える。

〔5年国語〕

・小問では、「発表原稿の結論をとらえる」が23ポイント、「要旨をとらえる」が18ポイント下回っており、要点を押さえる指導などについて工夫が必要である。

〔5年算数〕

・正答数が15問以下の児童が全体の約40%となっており、この層に属する児童へのきめ細かな指導が引き続き必要である。

〔5年理科〕

・観点「観察・実験の技能」を問う問題の正答率は87%であり、基礎的・基本的な技能の定着が図られている。



〔1年国語：教材提示の工夫〕

(2) 質問紙調査結果の分析（25年度抜粋）

*（ ）は県の値

項目	学年	4学年	5学年
① 国語の授業の内容はよくわかりますか		100(95)	92(89)
② 算数の授業の内容はよくわかりますか		94(90)	76(88)

分析：TT指導でも、下位の児童は、一斉指導の中での困難さを示している。

(3) 分析結果→→授業改善の視点と支える取組へ（11月職員会議・校内研究会で共通理解を図った）

〔授業改善の視点を明確にした日々の授業実践〕

- ① 自力解決の時間を確実に保証し、自分の考えを記述させる。
- ② 自分の考えを伝える場と時間を必ず保証する。
- ③ 認め合える教師の言葉を鍛える。
- ④ 少人数指導の検討をする。
- ⑤ TTについて、より効率的な指導・支援が実施できるようにする。

〔授業を支える取組〕

- ① 小テストや反復練習を計画的かつ継続的に行うことにより、基礎学力を身に付けさせる。
- ② ICT活用等による、主体的な学習の促しにより、学習意欲の向上と学習内容の一層の理解を図る。
- ③ 放課後等の学習支援により、定着が不十分な児童へフォローアップを図る。

第1段階

2 H26年度スタートにあたって→「4月：校内学力向上委員会」において全職員で共通理解を図った。

(1) 目標の設定…H25年度の分析を踏まえ、より具体化した目標の設定

- ① 各教科における正答率 50%未満の層の減少と 80%以上の層の増加
- ② 小5算数における「数量関係」領域の正答率を 10 ポイント以上上昇させる。
- ③ 児童質問紙「授業内容がよく分かる」の 1 番の回答を各教科とも増加させる。

(2) 共通理解した取組内容

ア 組織的な取組〔放課後支援教室・放課後補充等〕

名 称		対象児童	内 容
授 業	T.T (算数・国語)	全学年	算数 (6 年以外)・国語 (1・2 年生) の基礎基本の定着
	少人数指導 (算数)	6 年生	算数の学力定着度別に分けた少人数指導
年 間	校内計算大会・漢字大会	全学年	漢字・計算の既習の定着の確認
	CRTアシスト問題の実施	全学年	主に単元終了後に実施
放 課 後	放課後等学習支援教室	全学年	宿題など静かな環境で取り組みたい児童の支援 宿題の定着ができていない児童の指導 四則計算の定着と補習による回復指導
他	長期休業中の学習支援教室	全学年	長期休業中の学習の支援 (希望する児童を対象)

イ 授業改善に向けた視点

- ① 「学習課題 (見通し)」と「まとめ (学習の振り返り)」を板書に位置付けるとともに、子どもが学習課題の解決に向けて思考し、自分の考えをノートなどにまとめるような指導を行った。
- ② 指導目標が達成できたかどうかを、教師が確認する場面を授業に位置付け、子どもに「わかった」「できた」という実感を与える指導を行った。



ウ 授業における具体的取組

- ① 学習規律の確立
 - ・授業規律の確立について、児童の意識を高める。
- ② 繰り返し学習の重視
 - ・ドリル形式の問題に毎日取り組ませ、基礎的・基本的な知識・技能を鍛える。〔放課後の個別の学習支援〕
- ③ 授業形態の工夫
 - ・終末：最後の 10 分間に、その日の学習を振り返り解決できるような問題をやる。
 - ・漢字の練習、読む時間を確保する。
 - ・考える時間と定着・練習問題をする時間のメリハリをつける。
 - ・単元テスト後にできなかった問題を中心に学習する時間を設定する。
 - ・個別指導、宿題の活用、正答率の低い問題について類似問題を取り組ませる。

エ 家庭・中学校との連携

- ・家庭学習強化週間の継続と工夫

3 H26年度全国学調・県学調の結果と分析

(1) 全国 (6 年) 及び県学調質問紙の集計結果 (主なものを抜粋)

※1・・・6 学年の 25 年度は、県学調の値。5 学年の 25 年度の値は、4 学年時の値。
 ※2・・・() 内は、県の値

	6 学年		5 学年 (県)	
	25 年度	26 年度	25 年度	26 年度
①国語の授業の内容はよくわかりますか	↑ 92 (89)	↑ 87.5 (83.8)	↑ 100 (89)	↓ 88 (90)
②算数の授業の内容はよくわかりますか	↓ 76 (88)	↑ 83.4 (82.5)	↑ 94 (90)	↑ 94 (89)
③社会の授業の内容はよくわかりますか	↓ 84 (87)		↓ 87 (88)	87 (87)
③理科の授業の内容はよくわかりますか	80 (93)		↑ 100 (95)	↑ 100 (94)

分析②：特に国語の「わかる」児童の落ち込みが見られた。

分析①…6 年は、前年度から少人数指導を取り入れたことにより、特に下位の児童が改善されてきた。

第二段階の①

第二段階の②

(2) 全国及び県学調の分析（主なものを抜粋）・・・11月分析

ア H26年度全国学力・学習状況調査結果の分析（抜粋）

- ① 国語の正答率は、「知識」「活用」とも全国・県平均を上回った。特に「活用」の正答率は、全国を10ポイント以上、上回った。全校で取り組んでいる「確かに読み取る力を身につける」国語科指導の研究実践の成果と思われる。
- ② 算数は、「知識」「理解」とも全国・県をやや下回ったが、差は縮まっており、少人数指導の効果が表れてきたものとする。
- ③ 質問紙調査では、「算数の授業が分かる」児童が8ポイント近く上がった。昨年度の分析を基にした指導形態及び指導内容の工夫改善が、特にも下位の児童の意識に効果的に表れたものとする。しかし、まだ「テレビ・ゲームの時間が長い」「家庭学習の時間が不足している」等の実態も見られ、家庭との連携をより一層図っていくことが必要である。

イ H26年度岩手県学習定着度状況調査結果（5年）の分析（国語・算数から抜粋）

- ① 国語では、「段落構成を考えながら指定された長さの文章を書く」が28ポイント、「文章の構成に気を付けて、自分の立場とその理由について意見を書く」が50ポイント以上下回っており、「文章を書きなれる」「自分の考えを書き表す」ことをより一層意図的に設定していく必要がある。
- ② 算数は、正答数が16問以下の児童が全体の約40%で、さらに下位の児童の差も大きく、この層に属する児童へのきめ細かな指導がより一層必要である。数量関係の正答率も同様の結果だった。
- ③ 前年度は、国・算とも県を上回っていたが、今回は下回った。特に、下位の児童が問題文の内容の意味理解に困難さを示しており、授業の振り返りや練習問題等の工夫をしていかなければならない。
- ④ 質問紙調査の「算数の授業がわかる」児童が県と同レベルにあるが、下位の児童への指導形態や指導方法の工夫が早急に必要である。

(3) 分析結果をもとにした緊急対策

対策1 指導形態の変更

5年算数について、TTで指導してきたが、11月第3週より少人数指導へ変更し、より一人ひとりの困難さに対応していく。

対策2 きらきらタイム（反復練習）の工夫

担任及び少人数加配教員が、より個に応じた基礎学力を付けるための問題用紙を作成し、個別に指導を行う。

対策3 家庭学習の課題の工夫

一人ひとりの実態にばらつきが大きいことから、内容の精選、明確な指示、確実な点検を行う。また、家庭学習の成果を授業で生かしたり、発表したりする場面を設定し、より確実な理解と学習意欲を高める。



【5年少人数指導スタート】

(4) 分析結果を全校の授業改善に活かしていく。

① 視点を明確に、しかも具体的にした授業を全学年で共通理解して取り組む。

- ① 「学習課題（見通し）」と「まとめ（学習の振り返り）」を板書に位置付けるとともに、子どもが学習課題の解決に向けて思考し、自分の考えをノートなどにまとめる指導の機会を意図的に設定する。
- ② 指導目標が達成できたかどうかを、教師が確認する場面を授業に位置付け、子どもに「わかった」「できた」という実感を与える指導を行う。

4 H26年度の全国学調・県学調結果を活かす

(1) 2学期末～H27年度に向けた目標設定

- ① 各教科における正答率50%未満の層の減少と80%以上の層の増加 ←H26から継続
- ② 小6の算数A・B問題における正答率を5ポイント以上上昇させる。 ←H26から若干修正
- ③ 児童質問紙「授業内容がよく分かる」の1番の回答を各教科ともさらに増加させる。 ←H26から継続

(2) 学校の課題解決に向けた取組

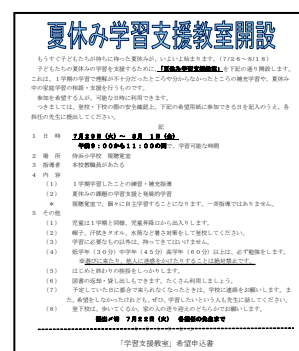
ア 組織的な取組

- ・校内〔放課後支援教室・放課後補充等〕

名 称		対象児童	内 容
授 業	T.T (算数・国語)	全学年	算数 (5、6年以外)・国語 (1・2年生) の基礎基本の定着
	少人数指導 (算数)	5、6年生	算数の学力定着度別に分けた少人数指導
年 間	校内計算大会・漢字大会	全学年	漢字・計算の既習の定着の確認
	CRTアシスト問題の実施	全学年	主に単元終了後に実施
放 課 後	放課後等学習支援教室	全学年	宿題など静かな環境で取り組みたい児童の支援 宿題の定着ができていない児童の指導 四則計算の定着と補習による回復指導
他	長期休業中の学習支援教室	全学年	長期休業中の学習の支援 (希望する児童を対象)

イ 授業改善に向けて・・・継続して取り組む内容、新たに工夫していく内容を全職員で共通理解を図る。

- ① 学習規律の確立
 - ・授業規律の確立について、児童の意識を高める。
- ② 繰り返し学習の重視
 - ・ドリル形式の問題に毎日取り組ませ、基礎的・基本的な知識・技能を鍛える。
- ③ 授業形態の工夫
 - ・終末：最後の10分間に、その日の学習を振り返り、自分の考えを書いて解決できるような問題を行う。
 - ・漢字の練習、読む時間を確保し、スパイラルに取り組めるようにする。
 - ・考える時間と定着・練習問題をする時間のメリハリをつける。
 - ・単元テスト後にできなかった問題を中心に学習する時間を設定する。
 - ・個別指導、宿題の活用、正答率の低い問題について類似問題を取り組ませる。
- ④ 家庭・中学校との連携
 - ・家庭学習強化週間の継続と工夫



〔長期休業中の学習支援案内〕

II 取組の評価・検証方法の視点・・・次年度以降、さらに全校で学力向上を有機的・効果的に進めるために、以下の視点で適時進めていく。

1 県学調、全国学調、CRTの結果分析

- ・県学調、全国学調及びCRTによる実態把握をもとに、以降の実践を推進する。
- ・6年間を見通した指導計画の作成や、授業を改善する際の参考とするため、校内の全児童を対象に、意識調査を実施し、一人ひとりの学習や生活の状況を把握する。
- ・結果は、アドバイスを添えて児童や保護者に伝え、各家庭において、生活習慣の改善や学習意欲の向上に生かせるようにする。

2 「漢字・計算カテスト」をスパイラルに取組めるように問題内容を定期的に見直し、テスト結果を検証し、実態の変化に着目し、授業改善に活かす。

- ・漢字・計算を中心に「小テスト」による実態把握
- ・単元終了後のテストによる実態把握

3 教務、研究部が中心となって、中間評価による改善策を推進し、年度末に評価を行う。

4 2学期以降実施する研究授業や授業観察に自己評価を行う。

- ・学び合い、高め合う場を設定し自己の考えを深める。

5 児童・保護者・地域からの評価を7月、12月に行う。

- ・集計結果は、学校便りで公表する。

【成果】

- 各種調査結果の検証・改善の構想から、実際まで、年度途中、年度末、年度初めなどと、計画的に共通理解を図ることによって、全職員が共通の思いで児童一人ひとりの学力向上に取り組めた。
- 授業改善に主体的に取り組む、成果が徐々に表れてきた。